

新しい「英語」カリキュラムの展開（２）

—教養英語の完成に向けて—

宮 田 学

１．人間科学科の英語カリキュラム

人文社会学部は1999年４月で開設４年目を迎えた。これで１年生から４年生までの学部学生が揃ったことになる。宮田は人間科学科（学年定員50名）に所属し、教養教育科目の「外国語（英語）」を担当している。学生たちは、[表１]のようなカリキュラムにしたがって「英語」を学ぶことになっているが、主な特色をまとめると以下のようになる。

- （１）１年次で４単位、２年次で４単位、合計８単位を必修としている。「応用英語」は３年次学生向けの選択科目（通年２単位）である。
- （２）必修の８単位をすべて半期科目で用意している。
- （３）１年次では小人数のクラス編成を実現するため、「コミュニケーション英語」ではクラスを３つに分け、「英語リフレッシュ」ではクラスを２つに分けている。
- （４）「コミュニケーション英語」は、英語を母語とする外国人教師が担当している。

[表１] 英語カリキュラム

	１ 年 次		２ 年 次		３ 年 次
前 期	コミュニケーション英語Ⅰ (スピーキング) 英語リフレッシュⅠ (ライティング)	前 期	総合英語Ⅰ (リスニング) 総合英語Ⅱ (リーディング)	通 年	応用英語 (英米文学)
後 期	コミュニケーション英語Ⅱ (スピーキング) 英語リフレッシュⅡ (リーディング)	後 期	総合英語Ⅲ (ライティング) 総合英語Ⅳ (時事英語)		

このようなカリキュラムの下で展開される授業の様子と成果を、宮田（1998）において「英語リフレッシュⅠ」を対象にして報告した。また、学生たちの英語学習に対する意識や姿勢を分析した結果を宮田（1999）でまとめた。本稿では、１年次から２年次にかけてのカリキュラム展開を、宮田が担当している「英語リフレッシュⅡ」「総合英語Ⅰ」および「総合英語Ⅲ」を中心に報告してみたい。

2. 「英語リフレッシュⅡ」の授業設計にあたって

「英語リフレッシュ」は、日本語の不必要な介入を避けて、英文レベルでの表現力（リフレッシュⅠ）と理解力（リフレッシュⅡ）を増すことを通して、既習外国語である英語をブラッシュ・アップする目的で設けられた科目である。宮田は、ライティング分野における指導の在り方を考えるにあたって、以下のように、英語学習の現状と問題点を指摘した〔宮田（1998：pp.21～22）〕が、「コミュニケーション英語」や「英語リフレッシュ」という科目が設定されたのは、これと同一の問題意識があったからに他ならない。

日本の英語教育の質にかかわる多くの問題は、結局のところ「日本語⇄英語」の置き換えを軸とした指導法・学習法に由来する。英作文が長い間「和文英訳」であった歴史は、この事実をみごとに象徴している。日本人である以上、日本語を意識せざるを得ないという事情を認めたとしても、英語学習の場では日本語と英語を一言一句置き換えるような方法から脱却すべきである。

本来ならば、中学から高校へ、1年生から3年生へと学年が上がるにつれて英語で理解し、表現できる量が増えるはずである。ところが、現実には、かえって中学生よりも高校生のほうが日本語に頼る傾向が強い。「英文和訳」に偏りがちな英文読解の授業、受験を強く意識した「英文法」の学習、さらには、英語と日本語を一対一に対応させてやみくもに暗記する「語彙」の学習など、日本語を介入させることによって、本来の英語学習が阻害されているのではなかろうか。多くの学生たちは、このような態度や傾向から抜け出せずに、高校時代の学習習慣をそのまま大学にも持ち込もうとする。

宮田は前任校において、こうした問題点を克服するための、新しいタイプの授業づくりを進め、大学レベルにおける望ましい英語学習の在り方を提言した〔宮田（1994～96）〕。その際に宮田が投げかけた疑問は、予習は必要か、語彙の指導が行われているか、全文和訳は必要か、書き言葉に偏っていないか、英語の使用量が少なくないか、教材研究に基づいた指導プランを用意しているか、学習心理を視野に入れているか、ということであった。そして、問題解決に至る筋道を、＜過程の重視＞＜英語レベルでの理解・表現＞＜学習者中心＞という3つのキーワードにまとめた。これら3つの基本原則は、「英語リフレッシュⅡ」はもちろんのこと、「総合英語Ⅰ」や「総合英語Ⅲ」の授業設計にあたっての指導原理でもあると考えている。

3. 「英語リフレッシュⅡ」の授業展開

前述のように、「英語リフレッシュⅡ」は、英文レベルでの理解力を増すことを目的としている。したがって、知らない単語が出てくるとすぐに辞書で調べる、すべて日本語に訳さないとわからない、訳すことはできても筆者の真意を理解できていない、英語で書かれた物語を楽しむ余裕がない、そんな学生をなくすことができれば成功である。それを実現するためには、つぎのよ

うな授業タイプが考えられる。

A) 語彙レベルが学生たちの実態に合っており、内容理解を測るための適切な練習問題が付いているテキストを用いて、日本語の介入を低く抑えた授業を行う。

B) 1つの物語を鑑賞するための補助教材を作成し、それを活用した読解の授業を行う。

C) 各自の学力レベルとペースに合わせて速読を行う基礎訓練をしたり、学生自身が選んだ短編小説などを多読する（個別学習の形態をとる）。

これまでのところ、97年度にAタイプ、96年度および98年度にBタイプの授業を実施してみたが、今回はBタイプの授業展開について報告したい。

Bタイプの読解演習の授業については、宮田（1994）において詳しく紹介した。「教材との新鮮な出会い」をねらって構想した授業であるが、そのためには、予習を前提としない学習展開を保障する材料と方法が必要であった。そこで、録音テープまたはビデオのある文学作品を取り上げ、聞き取りのための教材（＝L教材）と読解のための教材（＝R教材）を自作して、半期または通年で読み進んだのである。教材化にあたっては、以下のような基本方針を立てた。

ア．テープまたはビデオを用いた聞き取り作業から始め、読解の作業に移る。

イ．読解では、概要把握（Exercise A）と詳しい解釈（Exercise B）を組み合わせる。

ウ．リーディングのためのさまざまなスキル（scanning, skimmingなど）が自然に習得できるような設問を与える。

エ．重要と思われる英文に限って、日本語で意味を考えさせる。

オ．教材との新鮮な出会いを実現するため、1回分毎のプリントをそのつど配布する。

カ．予習を前提としない代わりに、かならず宿題を課す。

キ．原則として、半期で1つの作品を読み終えられるように計画する。

教材化を手がけたのは当時4つの作品であったが、その後5つの作品が加わった。9作品のうち2つがビデオ作品を利用したものである。そのうちの1つ（作品I）の教材化にあたっては、ディズニーが製作したアニメーション映画のビデオ版から、聴覚障害者用の英文字幕（closed caption）を利用して、シナリオを文字化したものを用いた。（この媒体変換に際しては、本学部国際文化学科の日本助教授の手をわずらわせた。）

また、現在教材化に着手している作品は、アメリカ合衆国大統領夫人のヒラリー・クリントン自らが録音テープの吹き込みをして、第39回グラミー賞に輝いた“*It Takes A Village*”で、唯一の非文学作品である。これは、新生児の発育と発達、幼児教育や家庭教育の問題、子供と社会環境の問題などを論じており、人間科学科の学生にとってふさわしい教材である。このようなジャンルの作品も今後、教材化の対象に加えたいと考えている。なお、[資料1]に、これまでに完成した9作品の概要とともに、それらの教材としての難易度をまとめておいたので、参考にしたい。

98年度は作品D “When the Wind Blows”に取り組んだ。これは、イギリスの絵本作家レイモンド・ブリッグズの同名絵本をビデオ化したアニメーションである。登場人物のジェイムズとヒルダという老夫婦のせりふが絵本とほぼ同一のため、教材を作る時には便利であった。登場人物はこの二人だけで、ジェイムズの退職後に田舎で送っている静かな生活が、敵の核ミサイル攻撃によって一瞬のうちに破壊されるという物語である。原作を翻訳した絵本が篠崎書林とあすなろ書房から『風が吹くとき』というタイトルで出版されている。作品のアニメーションはレーザーディスクに収められており、英語版と日本語版の両方で楽しめる。授業では、レーザーディスクから英語版をビデオにダビングしたものを使用した。

98年は、インドの核開発に対抗してパキスタンも核実験を行うという世界的な緊張があった時点で、核戦争の恐ろしさを描いたこの作品を授業に用いるのによりタイミングと思われた。学生たちは、ビデオによる音と映像、そして文字化した教材という3つのメディアを通して、この作品に取り組んだのである。

ビデオ教材を用いた授業の利点の1つは、うまく聞き取れない部分を映像による情報によって補えられるというところにある。ジェイムズとヒルダの会話はイギリス人がごく日常的に交わすものであるとはいえ、ときどき聞き慣れない表現が混じっている。ジェイムズはよく言い間違えることがあり、それも聞き取りを難しくしている。さらに、第二次世界大戦にかかわった政治家や軍人の名前、戦争用語など特殊な語彙が出てくる。そんな難しさが映像（しかもアニメーション）の助けで、かなり減少したように思われる。

さて、授業は、毎回つぎのような手順で進めた。

1) 前回分の詳しい読解演習

- ① R教材を見ながらテープを聞く ② Exercise Bの答え合わせと解説

2) ビデオの鑑賞

- ① 前回分を再び視聴する ② 本時分を視聴する
③ 本時分についてQ & A（日本語による）

3) 本時分のL教材の配布

- ① テープを3回ほど聞いて空所を埋める ② 答え合わせと自己採点
③ テープを再度聞いて、正解を耳で確認する ④ 解答用紙回収

4) 本時分のR教材の配布

- ① 各自で英文を黙読し、Exercise Aに取り組む ② 答え合わせと解説

5) 宿題の指示： 次回までにExercise Bをやってくる

アニメーションは約80分の作品であるが、宮田の判断で10章に構成し直したので、1回分は7～10分となった。学生たちは、前回分の学習が完了した時点で、その部分のビデオをもう一度見て、どの程度理解力が増したかを自分で確認することになる。それに続いて本時分を初めて見

て、理解度を試す質問に答える。このQ & Aは、物語の流れと要点を押さえることを第一に考えて日本語で行った。例えば、物語の冒頭部分では以下のような発問をした（カッコ内は期待される答え）。

- Q 1 おじいさんの名前は何というのでしょうか？ [ジェイムズ]
 Q 2 何才くらいだと思われませんか？ [60～70才くらい]
 Q 3 どこからどうやって帰ってきましたか？ [図書館からバスで]
 Q 4 家にはだれと住んでいますか？ [奥さんと二人で]
 Q 5 ラジオを聞いて、どんなことがわかりましたか？ [戦争になりそう]
 Q 6 家の戸をはずしたのは、何のためですか？ [シェルターを作るため]

L教材は、他の作品の場合と同様に、空所補充の問題を作って書き取りに取り組ませたが、この作品では、全体を対象とせずの一部のみを取り上げた。他の作品と異なり、すでにビデオを通して一度聞いているということと、時間の節約を考えてのことである。

R教材は、やはり概要把握のExercise Aと詳しい解釈のためのExercise Bで構成したが、詳しい解釈の際には、ジェイムズの言い間違いや人名、戦争用語についての注を盛り込んだプリントを作って配布した。また、10回分の学習を終えた時点で、日本語の吹き替えによるビデオを2回に分けて鑑賞した。

このような授業を大学レベルでの平均的な読解の授業と比較してみると、7つの特徴にまとめることができよう [表2]。

[表2] 授業の特徴

平均的な読解の授業	作品Dの授業
<ul style="list-style-type: none"> ・一冊のテキストをあらかじめ入手 ・文字教材のみが一般的 ・予習を前提としている ・聞き取りを実施することが少ない ・全文和訳を軸に授業が進む ・模範訳や解説を聞く学習となる ・物語の途中で終わりがち 	<ul style="list-style-type: none"> ・そのつど1回分の教材が配布される ・映像+音声+文字の教材構成 ・予習の代わりに宿題が課せられる ・ビデオの視聴と書き取りを実施 ・概要把握/重点方式（一部和訳）を採用 ・課題解決学習となる ・1つの物語を読み終える

4. 授業を受けた学生たちの感想

日本語版のビデオを見た後でアンケートを実施し（回答者26名）、作品Dを扱った授業についての全般的な感想を求めたところ、92%にあたる24名の学生が「(とても)よかった」と答えてくれた。以下に、自由記述部分より、代表的な意見や要望を示しておく。

- ・やりやすかったし、新鮮だった。ストーリー性のある見やすいビデオだったし、映像があるのは分かりやすい。
- ・今までのような、英語を勉強しているという感覚がなくて、物語を読み進み、それに英語が伴っているという感じがした。次はどんなになるんだろうと、先を読むのが楽しみだった。
- ・英文を読む（訳す）とき、今までの授業では直訳することにこだわりすぎていて、物語として楽しめることが少なかったから。
- ・ビデオを見ることでヒアリングの勉強ともなったし、ただだらだらと英文を読み、訳していくのではなく、ポイントを押さえていたので、要領がよかったと思う。
- ・ビデオの内容はまあ面白かったけど、もうすこし次はどうなるのか、わくわくするようなものだ、さらに興味をもてたと思う。
- ・私の英語力が足りないせいもあると思うけど、教材が難しかった。ジェームズが単語をまちがえていて、辞書を調べても意味がわからないときに困った。
- ・毎回物語は進んでいるけど、設問のパターンが毎回同じで、途中で飽きてしまう。

5. 「総合英語」の授業設計

2年次になると「総合英語」の授業が始まり、[表1]に示したように、前期に「総合英語Ⅰ」と「総合英語Ⅱ」、後期に「総合英語Ⅲ」と「総合英語Ⅳ」を学習するようになっている。このうち宮田が「総合英語Ⅰ」（リスニング分野）および「総合英語Ⅲ」（ライティング分野）を担当している。

1年次ともっとも違う点は、クラスサイズが倍になるということである。つまり、人間科学科全員（50名前後）を対象とした授業になる。リスニング分野やリーディング分野はまだしも、ライティング分野でこの人数を教えるのは大変なことである。担当教師がまず考えなくてはならないのが、この点である。

そこで、ライティング分野の学習を、年間を通して行うスピーチの活動と、後期に行うエッセイ・ライティングとに分けて実施することにした。学生たちはすでにライティングの基本を学習しているはずなので、2年次はその応用・発展段階と位置づけ、その第一課題として、スピーチのための原稿を書き、それをクラスメイトの前で発表するという活動を設定するとともに、ライティング分野での仕上げをする目的で、与えられたテーマについて、ある程度まとまった英文を論理的に書くという課題を設けることにしたのである。

スピーチには毎回20分程度を割り当てたので、残りの1時間ほどを前期はリスニング、後期は

ライティングに重点を置いて授業を組み立てた。それぞれの授業内容については、後述する。

6. スピーチの活動

週1コマの授業は年間で30回前後となるが、毎学期2～3回ほどは授業の導入やまとめ、さらに期末テストなどにとられるため、実質的な授業のためには25回程度しか確保できない。50名の学生にスピーチさせるには、一回につき3名位を予定しておかないと全員が終わらないかもしれないので、前期第4回目の授業から名簿順に3名ずつ取り組ませることにした。この結果、97年度、98年度ともに後期の冬休み前にはスピーチ活動を完了することができた。

スピーチのテーマは学生たちに自由に決めさせることにしたが、いわゆる“Speech Contest”のようになることを避けたいと思った。ともすると演題が堅苦しいものになりがちで、聞く側にとってわかりづらい内容となる傾向がある。もちろん大学生なので、政治や経済の問題あるいは社会問題を掘り下げて自分の意見を述べることは、必要なことではある。しかし、初めてスピーチをするという学生がほとんどと予想されたし、最初から多くを望んではいけない。なるべく身近で具体的な内容の話題で話して欲しい。そうすれば、聞き手にも理解しやすいものとなるであろうし、それが全体として楽しく有意義な活動につながる。

そこで、初級レベルでよく行われる“Show and Tell”というスピーチをさせることに決めた。これは、人に見せられるような物（実物、絵、写真など）を教室に持ってきて、それをクラスメイトに見せながら、それにまつわる話をするという活動である。この活動であれば、話が抽象的になったり、堅苦しい内容のスピーチになることは避けられるのである。

前期2回目の授業にて“Show and Tell”の紹介をしておき、3回目の授業で教師自ら実例を示すことにした。[資料2]はその時に配布したプリントである。4回目の授業からは、毎回3名の学生に“Show and Tell”のスピーチを行ってもらった。1年目の97年度は、初めての試みということもあって、学生たちがどんなスピーチをするのか心配したが、いざ開始してみると、心配は楽しみに変わり、当番の学生が何を持って登場するのかを期待して待つようになった。

自転車のサドルを持ってくる者、フルーツを持ってきて演奏してくれる者、珍しい紅茶の葉を持ってきて実際に紅茶を入れる者など、実にさまざまであったが、何といても一番驚いたのは、熱帯魚であった。自分の部屋で飼っている熱帯魚を、別の容器に移し替えて大学まで運んできてくれたのである。スピーチが終わった後、皆でひとしきり彼の熱帯魚を鑑賞したのは言うまでもない。

スピーチは3分で終わるように時間制限を設けたが、教卓に砂時計を置き、時間の経過を目で確かめられるようにした。スピーチ終了後、教師からスピーチの内容に関して英語で質問をしたが、3分未満でスピーチを終わった学生には、その時間に相当する分だけ質問の数を多くするように心がけた。学生は英語でその質問に答えなければならなかったが、このやりとりを通して、疑問点や不明な点が明らかになるとともに、聞き手の学生たちには、スピーチの要点を確認するのに役立ったと思われる。

学生たちは、スピーチのための原稿を教師に提出することを義務づけられた。教師は、授業中、スピーチを聞きながら、発音／暗唱度／印象の3項目について5段階で評価するとともに、授業後にスピーチ原稿を読んで、英文の量／質の2項目を評価した。このようにして、合計25点分が、後期の「総合英語Ⅲ」の評定に組み入れられた。

後述する授業アンケートにおいて、“Show and Tell”についての感想を求めたところ、「(とても)よかった」とした学生は、97年度が回答者の65.9%、98年度が63.2%であった。その理由を整理してみると、「初めての貴重な体験ができた」「人の発表を聞くのが楽しかった」「クラスメイトの新たな一面を発見した」などの、スピーチ活動を支持する意見とともに、「スピーチ原稿を書くのが難しかった」「発表するときには緊張した」などの正直な告白が多く見られた。さらに、「苦勞しただけの効果があつたか疑わしい」というような指摘もあった。以下に、主な感想や意見を拾い出しておく。

- ・自分の考えを英語で話すことは初めてのことだった。難しかったが、いい経験だったと思う。
- ・原稿を考えるのも大変だったし、発表するのも緊張したので、難しかったと感じた。
- ・自分がやるのはけっこう重荷だったが、クラスの友達の意外な面やためになる話が聞けて楽しかった。
- ・皆、いろいろと演出をこっていて、見る方が面白かった。
- ・スピーチをもっとやってほしい。1回目は慣れなくてダメだった人でも、2回目はきっと上手にやれるはず。その方が自信もつくと思う。
- ・3分にしなくても、しゃべるのが速い人も遅い人もいるので、いいと思います。
- ・みんなが積極的に質問するようにする。
- ・スピーチは、聞いている分にはいいのだけれど、自分の番のときは大変苦勞し、そのわりには、その日の夕方には覚えたことを忘れてしまったので、あまりためにならなかったと思う。
- ・スピーチは良いのかわからない。自分の力量でしか出来ないし、事前にアドバイスがないのでは、発展材料(能力の)にならないから、あまりよいとは思えない。
- ・自分の番が終わってしまうと、他の人のスピーチを聞くのが面倒になってしまった。

7. 「総合英語Ⅰ」の授業展開

英語を聞き取る力は、話全体の要旨を理解する力と、話された語句を正確に把握する力とが備わって、はじめて完全なものになる。また、日本人が概してリスニングに弱いのは、自然に話された場合のスピードについてゆけないからであると言われている。「総合英語Ⅰ」では、この「自然なスピード」にいかにして慣れるかという処方せんを用意して、学生たちのリスニング力をレベルアップすることを目標とした。

97年度は、音の変化のメカニズムに焦点を合わせたテキスト(“Listening to Natural English”)を用いたリスニング演習とラジオドラマの鑑賞を行い、98年度は、短編の物語を聞き取る

ための練習問題が工夫されたテキスト（“The Storyteller”）を用いてリスニング演習を行った。
97年度の授業では、毎回、つぎのような手順で進めた。

- 1) 英語の歌 “Enjoy Pop Songs” （2回で1曲終了）
 - ① 歌詞の聞き取り、または歌手の紹介文の聞き取り問題 ② 歌を歌う
- 2) 小テスト（前回分の復習を兼ねた書き取り問題）
- 3) スピーチ “Show & Tell” （3人）
- 4) 前回分のポイントを含む文の音読チェック（指名された学生）
- 5) 会話の聞き取り
 - ① テープを聞いて、概要を把握する ② 日本語によるQ & A
 - ③ テキストを見ながらテープを聞く ④ ポイントを含む文の音読練習
- 6) 書き取り練習
 - ① テープを3回ほど聞いて空所を埋める ② 答え合わせと自己採点
 - ③ テープを再度聞いて、正解を耳で確認する
- 7) ラジオドラマの鑑賞
 - ① 前回分をテープで再び聞く ② 読解問題の答え合わせ
 - ③ イラストを見ながら、本時分を聞く ④ 概要把握の設問に答える
 - ⑤ スクリプトを見ながら、テープを聞く
- 8) 宿題の指示： ポイントを含む文の音読練習／読解問題を解く

自分で発音できない音を識別するのは困難を伴うが、発音できるようになると聞き分けられるようになる。会話の概要を把握した後で、学習のポイントとなる音の変化に着目して音読練習を行ったのは、このためである。ラジオドラマは飛行機墜落事故の謎を解き明かすミステリー物で、まず概要把握を行ってから、スクリプトによって個々の英文を目で確かめるという手法を採用した。話された語句を正確に把握するための作業も必要と考えたからである。

98年度のテキストでは、語彙の学習、物語の予測、物語に出てくる語句を類似の語句と聞き分ける問題（英音の識別ドリル）、物語の聞き取り（要点把握）の順で学習を進めるようになっていたが、やはり、宮田の判断で、スクリプトを見ながら空所を補う書き取りの作業を組み込んだ。

8. リスニング力の測定

「総合英語Ⅰ」の第一回目（4月中旬）と最後の授業（夏休み明けの9月中旬）で同一の聴解力テストを実施し、リスニング演習の効果がどの程度あったかを測定してみた。これは、中学～高校程度の各種聞き取り問題から宮田が選り出して作成したもので、母音・子音の識別、弱音の識別、文単位の識別、文法・語彙力、会話構成力、文単位の意味理解、会話の文脈（背景）理解、話の要点把握および話の概要把握という9分野〔順に表3～4のA～Iに相当〕で構成した。

このテスト結果の平均点を年度別、分野別に示すと、[表3～4]のようになる。(総合点は、Iの分野を2倍して100点満点にしてある)

[表3] 97年度聴解力テスト結果

分 野	A	B	C	D	E	F	G	H	I	総合点
事 前	7.34	3.28	4.93	6.77	6.00	2.93	6.65	7.18	5.79	56.71
事 後	7.68	4.44	5.06	7.56	6.92	3.52	6.92	7.60	6.32	62.34

[表4] 98年度聴解力テスト結果

分 野	A	B	C	D	E	F	G	H	I	総合点
事 前	7.69	4.45	5.14	7.24	6.71	3.43	7.22	6.78	6.31	61.29
事 後	7.90	4.78	6.19	8.11	7.52	4.23	7.78	8.19	6.76	68.27

この結果から、リスニング演習の効果があったと判断されるが、さらに分野別に分析してみると、各年度で比重を置いた学習の成果が反映されていることがわかる。つまり、97年度では、B、D、E、とりわけBの分野での伸びが著しい。一方、98年度では、C、D、E、F、H、とりわけHの分野で著しく向上している。Bは「弱音の識別」、Hは「話の要点把握」であり、それぞれの年度で重点的に行った「音の変化のメカニズム」、「短編の聞き取り」の成果がこれらの分野に顕著に現れたと考えられるのである。

9. 「総合英語Ⅲ」の授業展開

97年度は、NHKの衛星放送を素材に編集されたビデオ教材（“Japan Update”）を用いてリスニングとライティングの学習を行い、98年度は、文化比較を扱ったテキスト（“The New Cross-Cultural Communication”）を用いて、日本の文化や社会を英語で紹介するためのライティング活動を行った。98年度の場合、毎回、次ページのような手順で授業を進めた。

使用したテキストには、日本人の家族を中心に、父親の知人のアメリカ人夫妻、娘の大学の留学生たちが登場し、日本の社会や文化を彼らの立場から眺めた内容を会話の形で示してある。練習問題の“Common Questions”では、日本社会や文化に関わる基本的な質問が集められ、それに答えることを通して、英語で日本を紹介する練習ができるようになっている。これを宿題として課したのである。

提出された答えの中から適当なものを選び出し、それを添削した結果を印刷して解答例のプリントを作成した。1回につき10名前後の学生が添削の対象となったが、なるべく番号順に選び、5回ほどで全員の英作文を取り上げるように配慮した。

- 1) スピーチ “Show & Tell” (3人)
- 2) 宿題の提出
- 3) 小テスト (前々回の会話文を用いた書き取り問題)
- 4) Comprehension (会話の背景に関する説明文)
 - ① テキストを見ながらテープを聞く ② 教師による補足／コメント
- 5) Idioms & Expressions (重要表現の学習)
 - ① 指名された学生による音読 ② ポイントの確認
- 6) Conversations (会話の聞き取り)
 - ① テキストを見ながらテープを通して聞く
 - ② Conversation Stopper (スムーズな会話を妨げる問題点) の学習
- 7) Common Questions
 - ① 質問内容の確認 ② 提出用紙の配布
 - ③ 前回分の解答例 (プリント配布)
- 8) Suggested Assignments & Topics
 - ① 英文エッセイのテーマ／話題となる候補を確認する
- 9) 次回の会話の聞き取り
 - ① テキストを見ないでセクション毎に聞く ② 日本語によるQ & A
- 10) 宿題の指示： Common Questionsの答えを提出用紙にまとめてくる

各課で取り上げられたテーマは、日本食、教育問題、都会と田舎、会社人間、環境と開発などであるが、それらのテーマに関連した具体的な話題が“Suggested Assignments & Topics”に示されている。学生たちは、この中からエッセイ・ライティングの題材を1つ選び、後期の最終授業までに英文エッセイを完成して提出することが義務づけられた。

10. 学生たちの反応

後期の最終授業にてアンケートを実施し、「総合英語Ⅰ」および「総合英語Ⅲ」の授業を受けた感想を聞いてみた。[資料3]に、その集計結果を示したが、これを見てわかるように、97年度は回答者全員、98年度は93%の学生が、これまでに受けた他の英語の授業と比較して、「(とても)よかった」と答えている。

「それはなぜですか」と、その理由を尋ねてみると、「授業内容が充実している／バラエティに富んでいる」「工夫があって授業に集中できる／飽きない」「実践的／実用的だった」「予習がなくてよい」「高校までの授業と違って新鮮だった」「リスニングができてよかった」「聞き取りの力がついた」などの意見が目立った。代表的な意見や感想を紹介しておこう。(かっこの中の98は年度を示す)

- ・授業の進度が一定で、目的がはっきりしているのがよかった。スピーチやリスニングの小テストなどもよかった。(98)
- ・授業の構成がしっかりしていたし、先生の工夫がとても感じられて集中できるよいものだったと思います。
- ・実用的で面白い教材を使った授業だったから。予習・復習にそれほど手間がかからず、授業に集中できたから。
- ・教材の内容がおもしろかったから、聞き取りにしろ、問題をやるにしろ、楽しかった。(98)
- ・教科書中心の文法や単語をつめこまなくてはならない、これまでの英語授業に比べ、音や映像を取り入れて非常にリラックスして授業を受けることができたので。
- ・高校のような文法や日本語訳が中心の授業が大嫌いだったので、聞き取りは苦手だけど、「全体としてこういうこと」という、いい意味で大雑把な授業は、英語に対して気楽になりました。(98)
- ・全員が常に考えながら進んでいたの、常に授業に参加できたから。自分の英作がプリントに採用されて嬉しかったので。(98)
- ・音の変化というのは今まで習わなかったことなので、リスニングを聞く上で、1つの重要なことになったと思う。
- ・ラジオドラマは、次の授業にも出ようという気にさせてくれた。
- ・英語の歌は、授業で覚えると、金曜は1日その歌を歌っていた。
- ・英語の歌はなじみのある歌が多く、授業を楽しむことができた。ビデオ教材は、すごく速くしゃべる英語に徐々にについていけるようになったので、ためになった。
- ・ビデオは内容が日本のことというのがよかった。身近にあっても知らないことなどが話題にあって、ためになった。
- ・物語の聞き取りは、話の内容がおもしろかったの、聞きながら「この後どうなるのかな？ドキドキ」という気持ちがあって、自然に「聞こう」という気がおきたし、集中もできた。それに比べると、会話の聞き取りの方は、内容的にはおもしろくなかったが、会話独特の言い回しなど勉強できてよかったと思う。英音の識別ドリルは、今までにない問題で、とてもおもしろかったです。(98)
- ・後期、毎週英作文を書いたのは、英語力をつけるという点ではよかったが、日本のことを理解するうえでも役に立った。(98)
- ・前期では“Enjoy Pop Songs”の英文でも聞き取れなかったりすることが時々あったが、後期に入ってビデオの英文を聞くようになると、それがかなりスローペースに感じられるようになり、英文に聞き慣れたことを実感しました。
- ・1年間で、自分のヒアリングの力がずいぶん伸びたのがわかるし、授業内容や課題も面白く、また無理せずこなせたから。

- ・自分の英語力が上がっているという実感があったから。(98)
- ・毎回小テストをやるのは、張りが出てよいと思う。

一方、1年間で取り組んだ学習内容を5つに分けて順位をつけてもらったところ、97年度は、「英語の歌」が一番面白く、「ビデオ教材による学習」が一番難しく、ためになったと判断し、98年度は、「物語の聞き取り」が一番面白く、「英作文の宿題」が一番難しく、「スピーチ」が一番ためになったと判断している。

さらに、内容別に5段階の総合評価を行ってもらった結果から、「とてもよかった」と「よかった」の評価を与えた人数を合計し、回答者数に対する割合を算出してみた。すると、97年度は、英語の歌(92.7%)、ビデオ教材による学習(75.6%)、ラジオドラマの鑑賞(68.3%)、スピーチ(65.9%)、音の変化についての学習(46.3%)の順、98年度は、物語の聞き取り(78.9%)、英音の識別ドリル(73.7%)、スピーチ(63.2%)、会話の聞き取り(60.5%)、英作文の宿題(52.6%)の順に高い評価を得た。

97年度の「音の変化についての学習」が不評であったのは、意外であった。他の4つの学習項目からかなり離れて、「一番面白くなかった」(わずか、60ポイント)ということで、相対的な判断が働いたのであろうか。

これに比べると、98年度の「英作文の宿題」が低めの支持率となったのは、うなずける。以下に引用したコメントに見られるように、ためになったとは思うものの、毎回必ず宿題に出されるし、資料を調べないと答えられないので大変だった、というのが素直な感想で、それが支持率を下げた原因であろう。

- ・英作文は自分の頭で考えて書かなければならないので、ためになったと思う。
- ・英作文は毎回苦戦したが、いかに自分が日本のことを知らないか痛感し、実際に調べることで知識を増やすことができた。
- ・英作文は、統計の資料を探し出すのが大変で閉口しました。
- ・英作文は毎回提出がしんどかった。自分で調べて英語で文章を考えるのは、きっとためになると思ってはいながら、なかなかまとまった時間がとれず、つい簡単にすませてしまった。

さて、全体としては、きわめて肯定的に受け止められた「総合英語」の授業ではあるが、さらに良い授業とするために、どのようなことが考えられるであろうか。学生たちの提案に耳を傾けてみよう。(スピーチに関しては、6節参照)

- ・90分の中でいろいろなことを詰め込みすぎているような感じで、忙しい授業だったので、もう少しやることをしぼった方がいいように思った。
- ・毎回毎回サッサッと過ぎていくだけで、ただ流れ作業的に終わっていたと思います。もっと細

- かくリスニングのコツみたいなものも付け加えてもらいたかったです。(98)
- ・プリントが多くてたくさんたまってしまい、整理が少し大変です。
 - ・難しい聞き取りばかりでなく、たまには全部わかるようなものをやらせてほしい。いつもいつもひとケタしか取れないと、とても自信がなくなる。
 - ・聞き取りが苦手な人へ、もう少し救済措置を。というのは甘えでしょうか。(98)
 - ・ラジオドラマの内容はよかったので、もう少し関係がつかみやすいものがよいと思う。
 - ・ビデオ教材の英作文はない方がいいと思う。ほとんど教科書と同じ英文だから書き写すだけで、意味がないように思った。
 - ・英作文はなるべく全員に添削してほしい。でも、毎回は無理だろうから、宿題の回数を減らすか、問題を減らした方がいいと思う。(98)
 - ・英作がしっかりと添削されるわけではないので、やりっぱなしの感じがあり、やっても身にはならないと思った。(98)
 - ・統計の数字は先に提示しておきます。文化や言葉の説明は自分たちで調べて身になるので、いいと思います。(98)
 - ・英作文で、質問に答えるより、自分の意見をもっと書く作業の方が良いと思う。(98)
 - ・宿題は2週間に1回ぐらいがいい。(98)
 - ・ときどき文法について復習できるといいと思う。
 - ・「コミュニケーション英語」の発展版といった、英語で話す機会があったらよいかもしれない。

毎回、冒頭でスピーチを行ったため、1コマの授業構成に多少無理が出たことは否めない。「ゆとりがない」と感じた学生が多くいたであろう。学習内容をいかに絞り込むのが課題となる。そうすると、「英語で話す機会を多く」という希望は叶えられそうにない。

聞き取りは、読む力や書く力に比べると個人差がきわめて大きい。よく聞き取れないという学生に対しては、テープを貸し出すなどの個人指導が必要かもしれない。学習内容としては、自然なスピードで話される英語を聞き取るための基礎訓練(97年度)と、物語や会話の概要を聞き取る応用練習(98年度)とをうまく組み合わせるのがよいと考えている。

97年度の英作文は、いわゆる和文英訳の問題で、確かに簡単なものであった。それに比べると、98年度の英作文は、資料調べが前提となり、かなり難しいものとなった。今後、日本の社会や文化について英語で発信する必要性が増すということを考えると、このような学習が重要となる。しかし、添削については、それに必要とされる時間と労力を考えると、消極的にならざるを得ない。

11. 教養英語の完成を目指して

名古屋市立大学では、人文社会学部および芸術工学部が完成年度を迎えたのを機に、既存の3学部(医学部、薬学部、経済学部)とともに、5学部共通の教養教育カリキュラムを2000(平成

12) 年度より実施する運びとなった。芸術工学部における外国語科目の単位数削減などのカリキュラム改定があったほか、未修外国語のクラスを月曜日の午前に一斉開講したり、共通教養科目群（従来の人文科学、社会科学、自然科学の教養科目）を木曜日の午前と金曜日の午後に帯状で開講するなど、思い切った改革が進められようとしている。

人文社会学部では、各学科における専門科目の見直しがあったものの、教養教育科目の「外国語（英語）」に関してはカリキュラム上の変更はなく、担当者の交替や移動が予定されているだけである。個人的には、2年次の「総合英語」のクラスサイズを「英語リフレッシュ」並にして授業の効率を上げたいが、担当授業総数の調整、非常勤講師枠の確保など、それに必要な条件を整備するには時間がかかりそうである。

宮田は、学部開設以来、自らが担当する授業において「大学レベルにおける望ましい英語教育」を実現しようと、実践を続けてきた。そして、その基本路線と実践の経過・成果を、本稿および宮田（1998～99）にて報告した。今後も「教養英語の完成」を目指し、4年間にわたる実践を踏み台にして、さらなる努力を重ねたいと思っている。

〔参考資料・文献〕

- Kim R. Kanel 1997. “Enjoy Pop Songs” 成美堂
Rex Tanimoto 1997. “The Storyteller” マクミラン・ランゲージハウス
金田正也編 1991. 『英語教師のパソコン・ガイド』 大修館書店
宮田 学 1994. 「大学における英語の授業改造（1）－『講読』の新しい授業展開－」
名古屋市立保育短期大学研究紀要 第33号
_____ 1995. 「大学における英語の授業改造（2）－グループ活動を取り入れた『英文学』の授業－」
名古屋市立保育短期大学研究紀要 第34号
_____ 1996. 「大学における英語の授業改造（3）－新しいタイプの授業を目指して－」
名古屋市立保育短期大学研究紀要 第35号
_____ 1998. 「新しい『英語』カリキュラムの展開－ライティング分野における誤文指導－」
名古屋市立大学人文社会学部研究紀要 第4号
_____ 1999. 「英語学習の過去・現在・未来－人間科学科学生の実像－」
名古屋市立大学人文社会学部研究紀要 第6号
森川キャサリーン 1996. “The New Cross-Cultural Communication” 研究社
山崎達朗他 1997. “Japan Update” 金星堂
矢作三蔵他 1993. “Listening to Natural English” 開文社

〔資料1〕 各作品の概要および難易度¹⁾

教 材	A	B	C	D	E	F ²⁾	G	H	I
作品名	“Dreamtime”	“Sarah, Plain and Tall”	“Matilda”	“When the Wind Blows”	“Karen”	“Esio Trot”	“Charles’ Useful Bag”	“Emma & I”	“Pocahontas”
作 者	Roger Pulvers	Patricia MacLachlan	Roald Dahl	Raymond Briggs	Marie Killilea	Roald Dahl	Ruth Ainsworth	Sheila Hocken	C.Binder, S.Grant, P.LaZebnik
サイズ	A 5 判	B 6 判	A 5 判	A 4 判	B 6 判	A 5 判	A 5 判	B 6 判	――
分 量	5 8 頁	5 6 頁	8 0 頁	3 8 頁	6 3 頁	5 4 頁	5 5 頁	7 2 頁	――
発行年	1985年	1985年	1990年	1983年	1972年	1991年	1983年	1988年	1995年
出版社	ラボ教育 センター	Harper & Row	篠崎書林	Penguin Books	桐原書店	Penguin Books	弓書房	松柏社	Walt Disney
文の数 ³⁾	119文	114文	56文	103文	82文	60文	70文	126文	158文
総単語数 ³⁾	748語	934語	964語	666語	1080語	949語	840語	1138語	819語
文の平均語数 ³⁾	6.3語	8.2語	17.2語	6.5語	13.2語	15.8語	12.0語	9.0語	5.2語
難語率 ^{3) 4)}	2.8%	3.3%	4.6%	5.3%	2.0%	2.7%	1.7%	0.6%	3.4%
学生の反応 ⁵⁾	61.7%	43.0%	42.2%	73.7%	48.6%	21.1%	28.6%	50.0%	35.7%

※注 ¹⁾ 難易度については、各作品の第1回分を分析した。

²⁾ この作品Fのみ、5回のシリーズで教材を作成した。他はすべて10回シリーズ。

³⁾ 金田正也他「語彙分析データベース“D4000”」による。

⁴⁾ 難語レベル6以上の単語が存在する率を示す。

⁵⁾ 作品を読み終えた時点でのアンケートで、「とても難しかった」「難しかった」と答えた学生の割合。

〔資料2〕 配布プリント：“Show & Tell”の進め方

〔1〕 Show & Tellとは？

- ・スピーチの一種。
- ・単に話すだけでなく、何かを見せながら、それについて話をする。
- ・「何か」は、写真、ポスター、絵、おもちゃ、本、道具、衣類など何でもよい。
- ・なるべく身近なもので、クラス全体に見やすいものがよい。
- ・見せたいものがあるって、それについての説明を考えてもよいし、逆に、話したいことがあるって、それについて何を見せられるかを考えてもよい。
- ・スピーチ原稿を書き、あらかじめ内容を暗記してくる。
- ・発表の際は、原稿を読まない。顔を上げて、クラスの人たちに語りかけるようにする。
- ・クラス全員によく聞こえるように、大きな声で話す。
- ・見せるものを、いつ、どのように提示するかを考えておく。

〔2〕 このクラスでのルール

- ・一人3分以内で話し終わること。
- ・早く終わった場合には、聴衆からの質問に英語で答える。
- ・スピーチ原稿は、B5のレポート用紙に1行おきに書く。
- ・清書原稿を、スピーチ終了後に提出する。
- ・1回につき3人ずつ、5月の連休明けより、番号順に行う。

〔3〕 評 価

- ・「総合英語Ⅲ」の評定資料とする。全体の25％程度。
- ・スピーチの際の、発音、暗唱度、印象度、および、提出された原稿の量と質によって評価する。

〔資料 3〕 「総合英語Ⅰ・Ⅲ」の授業アンケートとその結果

1. これまでに受けた他の英語の授業と比較して、

	97年度	98年度
ア とてもよかった-----	12名 (25.5%)	6名 (13.3%)
イ よかった-----	35 (74.5)	36 (80.0)
ウ かわらない-----	0 (0.0)	1 (2.2)
エ 悪かった-----	0 (0.0)	2 (4.4)
オ ずっと悪かった-----	0 (0.0)	0 (0.0)

※それはなぜですか？(本文参照)

2. 年間を通じて5種類の学習に取り組みました。面白かった順、難しかった順、ためになった順に1～5の番号をつけて下さい。(以下の順位は、1位＝5点、2位＝4点、3位＝3点、4位＝2点、5位＝1点、として算出した合計点による)

97年度	面白かった順	難しかった順	ためになった順
a) 音の変化についての学習	5 (60点)	4 (122点)	2 (153点)
b) ラジオドラマの鑑賞	2 (162)	2 (160)	5 (85)
c) スピーチ “Show & Tell”	4 (129)	3 (143)	3 (126)
d) 英語の歌	1 (192)	5 (60)	4 (119)
e) ビデオ教材による学習	3 (132)	1 (190)	1 (195)

98年度	面白かった順	難しかった順	ためになった順
a) 英音の識別ドリル	3 (132点)	4 (112点)	4 (124点)
b) 物語の聞き取り	1 (175)	3 (126)	5 (116)
c) スピーチ “Show & Tell”	2 (148)	2 (142)	1 (142)
d) 会話の聞き取り	4 (124)	5 (109)	3 (130)
e) 英作文の宿題	5 (67)	1 (158)	2 (131)

また、総合評価を行い、その記号を〔 〕に記入して下さい。(本文参照)

3. 上のように順位をつけ、評価した理由を簡単に書いて下さい。(本文参照)

4. 今後改善するとしたらどんなことが考えられますか、あなたの意見を述べて下さい。(本文参照)

5. その他、気づいたこと、言いたいことがあれば、書いて下さい。(省略)